アフガニスタン山の学校だより 翼（ばあーる）2024年号　発行：アフガニスタン山の学校支援の会　発行日：2024年12月8日

翼 ばあーる

アフガニスタン山の学校だより ばあーる 2024年号
通算40号

変わらぬ決意で

コンテナ教室で黒板に見入る（2012年）

その瞳の奥に

「民族の隔てなく」「教育が国の未来を創る」「戦いでは解決しないことを悟り、武器を置き、話し合い、国民の声を聞く」。山の学校支援の会発足のきっかけとなった抵抗運動の指導者マスードの言葉です。ただ、世界各地の現状は、マスードの言葉からもっとも遠いところにあるのではないでしょうか。

アフガニスタンではタリバンが権力を掌握してから3年が経ちますが、女子の中・高等教育の道は閉ざされたまま、人々は食料不安に襲われ、洪水や地震の被害者への救済も滞っています。人々の不当逮捕・投獄は茶飯事ですし、表で女性が声高で話すこと、歌を歌うことを禁止する法律も発令されました。こうした中で、命を絶つ若者があとを絶ちません。

だからこそ、「教育」という光を絶やしてはならないと思います。人々がポーランデ地区の故郷に戻り、以前の生活を取り戻し、子どもたちが登校できるようになった時、私たちは山の学校と地域の復興支援を再開する決意です。

その時までどのくらいの時間がかかるのかはわかりませんが、子どもたちの将来の夢や地域住民の平和と自由への思いは、人々の心の深いところで、息づいていると信じています。それに陽が当たり、芽吹く日が来るまで、私たちとともに、アフガニスタンを見続け、心を寄せていただけることを心から願っています。

11月15日

アフガニスタン山の学校支援の会代表
長倉洋海

報告会から

アフガニスタン山の学校支援の会代表
長倉洋海

（会場で話したことに加筆しています）

山の学校の現状

２０２４年10月26日、「鉛筆と銃」の上映会と報告会を開催しました。総選挙と重なった中でも、映画に51名、報告会に67名の方々が参加してくれました。今回の報告会に先立ち、現地の状況を掴むために、山の学校の元教員の男性とオンラインで話をしました。彼はタリバンから暴力を受け、命の危険を感じて地域を離れています。彼はインタビューの最後に、「名前と顔は発表しないで欲しい」と話しました。そのことからも厳しい状況はいまも変わっていないことを実感しました。

インタビューでわかったのですが、閉鎖されていた山の学校は現在、小学校のみが開かれ、30～40名の生徒が通っているということでした。そのほとんどは域外からやってきて空き家に住み始めた難民たちの子弟で、彼の推定では、元々地域にいた人々の80％は逃れたままで、残っているのは、家族をカブールへ逃した上で財産である羊や牛などの家畜を飼っている人たちだそうです。人々が戻らない理由は常にタリバンに監視され、いつか不当な扱いを受けるのではないかと怯えているからとのことでした。学校で教える元々の教員が6人、給与はタリバンから支払われており、教科書はタリバンが作ったもので、教育方針もタリバンが推し進める内容のようです。

報告会の巻頭挨拶

「逃れた子どもたちはカブールで学べているのか」という質問には、「在学していた」という証明書が必要で、最初は私が出していたが、私が出た後は証明書をもらえないので、学べていない生徒もいるはず。いずれにしてもタリバンの方針で7年生以上の女の子は学ぶことができず、家にいても家計を圧迫するので、否応なく結婚した女の子が多い」と教えてくれました。

第１部のスライド上映

「山の学校はどうなっていくのか」という質問には、「現在、生徒が少なく、4年生は誰もいない。いま通学している子の家族も元々域外の人たちなのでいつ離れていくかもわからず、いずれ閉鎖されるかもしれない」と答えました。

最後に、「30年、勤め上げてきた学校。学校のことを思い出さない日はない。どうして自分がそこにいないのかと悲しい思いに囚われている。平和になって、地域の人々と子どもたちが戻ったら、真っ先に駆けつけ、学校の再建に取り組みたい。手をかけてきた図書館も以前のよう再開したいと願っている」と涙ながらに話してくれました。

アフガニスタンのいま

タリバンが普通学校を閉鎖し、マドラサ（イスラム学校）を次々と建設しています。民間のマドラサは別ですが、タリバンのマドラサは、女性の自立や社会での就労を否定し、夫に従い、子を産むことを第一と教えています。しかし、他に学ぶ場がないので入学する子もいるようです。

タリバンを支えているのは米国からドル支援、麻薬や幻覚剤の生産、中東危機でアフガン上空を飛ぶ旅客機の通過料金の徴収などですが、隣国イランが出稼ぎ者や不法移民の締め出しを加速させており、大勢の帰国者を抱え経済的な困窮は進んでいます。またタリバンの庇護下にある世界各国の過激派は20を超え、彼らは中央アジアに浸透しようとしていますし、タリバン内部での権力闘争も続いており、不安定要素を多く抱えています。

これからの取り組みについて

報告会の第一部では、スライドで20年の支援活動を振り返りました。コンテナやテントでの授業風景、初めて教室に蛍光灯が灯った日、教室の最後の列にぴょこんと座り、遠慮がちに授業を受けていた就学前の子どもたち、辞典や万年筆などの賞品をもらう成績優秀の生徒たち、図書コーナーで本を読んだり、初めての絵の具を手にして絵を描く様子や全校生徒が楽しみにしていたスイカ割り大会……。

子どもたちの明るく、向学心に燃えた表情を懐かしく思い出します。現在、山の学校への支援はできませんが、首都カブールで学びたいと思っている中・高生はたくさんいます。会はいまカブールでタリバンの監視から逃れて授業を行なっている地下学校への支援を続けています。それを主宰している組織は、私が以前からよく知っている友人が代表を務めており、現在、カナダで暮らしながら現地と連絡を取り活動を進めています。この教室に学ぶ機会が得られていないボーランデの子どもたちが合流できるといいなあと思っています。この支援を継続しながら、いつかパンシールの山の学校が以前のように再開できる日を待ちたいと思います。

地下学校支援について

当会は昨年10月からカブールにてホームスクーリング・プロジェクトを支援しています。小学校を卒業した女子生徒が学ぶ、いわゆる「地下学校」です。83名の生徒が登録し（うち7名が家庭の事情で断念して）76名が数学、物理、生物、化学といった理系科目を学んでおり、出席率は91・5％。9月の期末には95％の生徒が最終評価をパスして上級学年へ進級しました。教

教科書で顔を隠す

師は元大学教員の女性教師2名で、当会はこの2名の先生の給与（月給約300米ドル）と冬の暖房費を支援しています。

2023年10月から1年間で約110万円を支出し、今後も継続する予定です（額は円→米ドル→現地通貨アフガニという為替レートによって変動します）。

セキュリティには万全を尽くしています。時々は場所を変えたり、予期しない訪問者があった場合にすぐに宗教の勉強に切り替えられるように、傍に常にコーランを置いています。

現在、勉学を続けたいと願う多くの女子生徒、特に小学校を卒業したばかりの生徒たちがウェイティングリストに登録して待っているそうです。また、現在学んでいる生徒たちはこのプロジェクトの継続と英語およびコンピューター科目の追加を希望しています。

カブールの地下学校で学ぶ女子学生たち

プロジェクトを運営するのは信頼のおけるカブールのNPO。教科書の提供、授業の質の高さを維持するための抜き打ちモニタリングの実施、万全の安全対策など、この運営チームのおかげで当会も安心して支援金を託すことができています。

家に閉じ込もるしかなかった女の子たちが、このプロジェクトを通して教師や同世代の仲間たちと繋がり、学び考える楽しさを知り、生きていくモチベーションも上がっているといいます。この地下学校で学ぶ女の子の中に、少しでも、ポーランデやパンシールの子どもがいてくれたら嬉しく思います。

［運営委員　森桂子］

カブール在住の安井浩美さんが第二部でオンライン登場してくださいました！

アフガニスタンの現在の状況や女性たちの置かれた状況についてお話しください

「物価高による生活のひっ迫や人々の現金収入を得られる機会の少なさなどが挙げられます。女子教育や女性の就労機会の少なさによる『子どもたちや妊産婦の栄養不良と未熟児での出産や産まれてくる子どもたちの先天性の障害の多さ』も大きな問題です。街中では、以前に比べてカラチ（車輪付きの屋台）で物品販売する女性が増えました。夫の死や病気、自分が働かなければ食べていけない女性がキッチン・ペーパーやミネラルウォーターなどを販売しています。本人も乞食をするよりはモノを売る方がよいと考えているからです。イスラームでは助け合いの精神があるので、彼女の助けになればと、少し割高でも、その商品を買う人がいます。他には低栄養による病気の深刻化や美容院の閉鎖などにみられる女性たちの憩いや娯楽の場のなさ、就労機会のなさなどからくるストレスもあります」

若い人の自殺が増えていると聞きますが

「希望を失って自殺している人が確かにいます。それくらいの絶望感があるのです。夢が閉ざされたと考える女子もいる。お金持ちでもなければ、毎日、明日何を食べよう（何が食べられるか）とか、日々をどうやって過ごそうとか考えざるを得ませんし、家族が大変な状況を毎日見ているわけです。そうした状況から抜け出したい、状況を受け入れたくないと考えて命を絶つ人がいるのです。問題は、家族を含めてケアやカウンセリングができる人が少ないこと。

でも、タリバン支配はまだ三年、〈そんなに簡単に希望を捨てないで〉と、私は思っています」

会場のご参加者から、映画『鉛筆と銃』の中で「以前は子どもの教育に無関心だった村人が、やがて娘を高校に通わせるための通学バスを出す支援をしてほしい」と望むようになったそうですが、その心境の変化について、どのように受け止めておられますか

長倉「支援を続けてきて、子どもたちが家で学校でのことを話すことを聞き、子どもが学校に通う生き生きした姿を見たりして、教育が必要だと思ったのではないでしょうか」

安井「『女は勉強せんでもええ』というような男尊女卑的な考え、自分が偏った考え方をしていたことがわかったからだと思います」

女子の高等教育が閉ざされているなかでの今後についてはどうお考えですか

長倉「国際政治を含めた外部の変化がアフガニスタンの内部を変えていくのではないか」

安井「アメリカがどうしたいかによって左右される。タリバンとの対話はしていくしかない。今は待つだけです。時が来るのを待つ以外にどうしようもない。（私たちは）外からアフガニスタンがいい方向に向かうようにしてくれるのを待つしかありません。人々は平穏にどうやって日々を過ごせるかを考えていると思います。私も外に出ようと思えば出られますが、出たくない。外に出るのは仕事と買い物くらい。どこかいつも何かが引っかかっていて、何をしていても楽しくないのです」

日々の生活では何かニュースはありますか

「うれしいニュースとしては、（私がやっていた）家庭料理［弁当屋］は一度閉めたのですが、従業員だった女性の強い希望によりケータリングでの営業を再開しました。それと、［シルクロードバーミヤンハンディクラフト工房（安井さん主宰）］は五名の女性が今もたくましく働いていますよ」

日本はどんな活動をしているのですか

「日本政府は日本大使館を再開させ、ユニセフ（国連児童基金）を通じてずっとポリオワクチンの接種や予防接種への支援を行なってきました。またUNハビタット（国連人間居住計画）を通じて貧困層が住むエリアのインフラも整備しています。そのおかげで居住者が水や電気を得る大変さから解放されていると思います。その他にもユネスコやNGOなどを通じた文化財保護や教育支援などを行なっています」

［運営委員　高橋美香］

現地の安井さんと話す

報告会 参加者の声

【第一部】「アフガニスタンの現実を見つめて」について

●今は一人でも多くの女の子が学校にアクセスできるようになることを切に願っています。●カブールの地下学校の支援の様子を拝見して、今後のアフガニスタンの子どもたちの学びの場、学ぶ姿に希望を感じました。そこに集う子どもが一人でも多くなるよう、支援させていただきます。●スライドトークの中で、山の学校の子どもたちとひとくくりにせず、一人一人の子どもの名前とともに、生活の詳細を伝えてくださったことがとても胸に響きました。●山の学校の活動がカブールの地下学校に生きていて、それが危険が及ばないように活動されていることに、感動しました。●長倉さんが現地に行けなくても、あきらめてない、知る、動く、未来に可能性を見いだす、そういう姿勢を私も大事にしたいと思いました。●世界の情勢のとても大きな力に何度も裏切られても、希望を失わない人々の姿に、逆にこちらが勇気をもらいました。（以上、会員）●地下学校の支援をもっと活発にできて、もっとたくさんの女性が教育を受けられたらと思った。●希望を見出せないと思っていたアフガニスタンで、女生徒の地下学校を支援するのは希望の光を見るようです。女性が自由に生きられるアフガニスタンが戻って来るようにと、心から思います。●「学びたい」と願う子どもたちの言葉と笑顔に救われました。（非会員）

山の学校の中学生徒たち（2011年）

【第二部】「現地からの報告」について

●今年も安井さんの元気なパワフルな声を聞けてうれしいです。●安井さんの現地からのお話、とてもリアリティーがありました。

支援団体が製作した教科書を受け取る

●複雑にからみ合ったアフガニスタンの現状を知ることができたこと、感謝します。●世界の縮図のような報告と感じました。マスードさんの向かおうとしていた心とは反対の方向へ、世界が向かう中、それでもタリバンの監視をかいくぐりながら本来の教育を行うたくましさに、確かにマスードさんの意志が生きていることを感じました。●会の続く限り支援したいと思います。（以上、会員）●アフマド・マスードさんが今も活動を続けていると知り力強く感じました。●自由を奪われた若者の苦しみを思うと、何もできない事がつらくなります。日本は国連を通じて援助するのは良いと思います。直接タリバンに援助しないで欲しい。日本政府もよく援助しているのを聞くと良かったと思います。（以上、非会員）

午前中の映画『鉛筆と銃』について

●しみじみと３回目の上映（スクリーン）を見つめました。ポーランデのせせらぎの音が印象に残ります。おだやかな生活が早く戻ってきますように。●マスードは中央アジアの知性だったとつくづく思う。●アフガニスタンの美しく広大な自然、子どもたちの純粋な瞳の光に心うたれました。●厳しい状況下の中で子供の笑顔が印象的で、この映画を多くの人に見て欲しい。●子供たちの美しい瞳に心打たれました。未来を守っていきたいと思いました。見つづけてまいります。●アフガニスタンの子供たちの目の奥にある輝きに、多くの希望を感じるとともに、現状を深く学ぶきっかけを多くいただきました。また、複雑にからみ合う状況でも、確かにマスードさんの魂が生きているという希望も感じました。（以上、会員）●あきらめないこと、未来に種をまくこと、自分には何ができるかということを、考えつづけたいと思います。（非会員）

［運営委員　澤出直子］

事務局より

◎好評をいただいているカレンダーはまだ残部がありますので、ご希望の方はご連絡ください。
◎不要切手や書き損じハガキのご提供をありがとうございます。郵便料金値上がりの折り、大変助かっています。今後ともご協力をお願いいたします。
◎住所変更の場合は、お手数ですがメールやハガキで事務局までご一報ください。

◉**価格：2,400円**（送料込）
◉**振込先：**下部記載の**ゆうちょ銀行口座**までお振り込みください。他行から振り込まれる場合は住所が通知されませんので、メールで事務局までご連絡ください。

アフガニスタン山の学校だより **ばあーる 2024年号・通算40号**

発行日：2024年12月8日　発行：アフガニスタン山の学校支援の会
〒187-0032　東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 気付
【振込先】ゆうちょ銀行 振替口座　加入者名：アフガニスタン山の学校支援の会
口座番号：00160-1-667404
電話：070-3281-1180　E-mail ▶ info_yamanogakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
編集・発行人＝長倉洋海　題字・イラスト＝近藤理恵　デザイン＝鈴木康彦
編集実務＝森 桂子　印刷＝藤田印刷株式会社

アフガニスタン山の学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会ったパンシール渓谷ポーランデ地区の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年4月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたって活動を続けてきました。その後2017年3月まで活動を延長。4月より第2期支援活動をスタートしました。